日本医療企画出版
「介護ビジョン」
2010年10月発行　P.60〜P.61に掲載

まちづくりとしての小規模多機能ケア

地域におけるまちづくりの拠点としての、小規模多機能型居宅介護の可能性と実践について考えていく。

まちづくりにつながるコミュニティケアの実践⑥

要支援・要介護高齢者がボランティアとして来所

前号より共生ケアとしてのコミュニティケア実践について記述していますが、今回は、高齢者の居場所と役割づくりについてです。高齢者と言っても、小規模多機能型居宅介護（以下、小規模）の利用者のことではありません。小規模の利用者以外の、地域に住んでいる高齢者のことを指しています。「地域の絆」の各センターでは、地域の高齢者が非常に多く活動しています。

各センターで実施している地域交流事業と称したさまざまなイベント運営の協力者の半数は60〜70代の方々です。ペットボトルキャップ、プラスチックトレーの回収や、庭木の剪定・草取り、建具の修理などにも地域の高齢者より多くのご支援をいただいています。こうした高齢者のほとんどは、介護を必要としない元気な高齢者ですが、なかには要支援2・要介護1といった要介護認定を受けている方や、軽度認知障害（MCI）のある地域の高齢者が活動されているのも特徴です。

最初のきっかけは、地域住民Aさん（要支援2）の来所でした。「人のお世話をするのが生き甲斐で、特に掃除が得意なのでセンターの掃除のお手伝いがしたい」と突然来られました。初めは単に協力的な地域住民と思い、快く活動に取り組んでもらったのですが、あるとき職員から「どうも認知症があるようだ」との報告を受けたのです。掃除のお手伝いはありがたいが、何度も繰り返し同じ指示を出しても伝わらない。地域包括支援センターに連絡を入れると、要支援2の方で、近隣にある居宅介護支援事業所のケアマネジャーが担当であることがわかりました。協議を重ねた後、当センターにおける週1・2回のお掃除ボランティアの活動が正式に始まり、Aさんのケアプランのなかに、当センターが介護保険以外の専門的な社会資源として位置づけられたのです。

のちにAさんの認知症が進行し、他法人の介護サービスを受けると同時に当センターでのボランティア活動は終わりました。その後、要支援高齢者のBさんが、「当センター利用者に昔の歌を歌って勇気づけたい」と、自ら定期的にボランティア活動に来たり、大正琴の元先生である要介護1の高齢者が、月に2回ほど大正琴の演奏に来所することもありました。

要支援・要介護高齢者が利用者ではなく、ボランティアとして来所している事実に外部の方は非常に驚かれるのですが、小規模の対象利用者像と収入面に鑑みれば、要支援や要介護1の方に登録を促進することは困難を要する場合もあります。また、見守りおよび軽微な家事支援程度で在宅生活の継続が可能となる要支援高齢者に小規模の登録が必要なのかというアセスメント上の問題もあります。現に、当センターに通っているほとんどの方が押し車、歩行器、杖等を用いて自ら自由に屋外の移動ができます。以前お伝えしたように、「地域の絆」では要支援の方の登録も受け付けていますが、アセスメントの結果、登録したほうがよい利用者には登録を勧め、ボランティア活動のための通所で十分な方には、そちらを勧めています。

将来の利用者として要支援高齢者を取り込み

登録者25人のうち、要支援の方が多く含まれればその事業所は赤字になります。これは制度設計上の問題なので、どうしようもない事実です。しかし、地域の要支援高齢者を拒否する必要はなく、利用者ではなく、地域住民として遊びやお手伝いに来てもらえれば良いのです。それこそが、地域のなかで居場所や役割が担える活動として、真の介護予防の取り組みにつながります。当法人ではまだ経験はありませんが、ボランティア活動をしている要支援高齢者が、やがて小規模の利用者として登録することも考えられます。それはすなわち、利用者の継続的支援につながると言えます。

次に紹介する事例も、こうした発想による取り組みの産物と言えます。Cさん（要支援2）は食事づくりと掃除のボランティアに毎日来ていました。近隣でひとり暮らしをしており、1日中家にいると良くないことを考えるので、自分の居場所と生き甲斐を求めて当センターに来られたのです。食事づくりと掃除、利用者の話し相手になるなど、職員は人手としても非常に助けられました。

また、元学校教師のDさんは、「何でも良いからボランティアをさせてもらいたい」と突然来られました。厳格そうな方で、何をお願いしてよいかためらっていると、「草取りでもいいからやらせてほしい」と言われたので、ありがたく活動に参加してもらうようになりました。この方も毎日来所するようになり、やがてセンターの敷地には雑草1本生えていない状況に。

問題は、次にお願いする活動でした。管理者の提案で、元学校教師という能力を生かした活動として、地域の子どもたちを対象にした書道教室の先生役をDさんにお願いしたところ、快く引き受けてくれました。子どもたちに呼びかけた回覧板には、Dさんの顔写真とコメントを載せました。私は当初、参加者はいないと推測していたのですが、初回から5人の子どもたちの参加があったので正直驚きました。その後、子どもの参加人数や教室の開催回数も増えていきました。夕方になると、お母さま方が子どもを連れて当センターに訪れます。なぜ、子どもを連れてくるのか質問したところ、「お年寄りの考え方や学ぶ姿勢を子どもたちに触れさせたいから」といった声が多くの方から挙がりました。つまり、私や管理者にはない能力をDさんはお持ちだったのです。

このように、共生ケアの場面においては多様な人間関係のなかからその能力が引き出され、それが誰かを支える社会資源となり、やがて地域の活性化にもつながっていくのではないでしょうか。コミュニティケアの実践は、やはり、まちづくりにつながっていると感じる毎日です。

小規模の和室で地域の子どもを対象にした書道教室。センターにかかわる一人ひとりの力を引き出すことで、新たな関係が芽生えることも

地域の高齢者が得意のハーモニカを毎週披露。利用者と合唱の練習も行っている

中島康晴
NPO法人地域の絆代表理事
なかしま・やすはる
社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員。1973年生まれ。主な職歴は、生活相談員、介護職リーダー、デイサービス・グループホーム管理者。福祉専門職がまちづくりに関与していく実践の必要性を感じ、特定非営利活動法人地域の絆を設立。現在、広島県内で3カ所の地域密着型サービス事業所を開設運営。
HP：http://www.npokizuna.jp/
「代表理事中島康晴のブログ」で社会福祉に対するさまざまな思いを掲載。